

緊急被ばく医療関連情報講演会

〔開催日時〕 令和7年2月21日（金） 15:00～17:00

〔開催方法〕 Webex

〔演題〕 「今そこにある被ばく-医療での被ばく調査研究から見えてくる現状-」

〔講師〕 量子科学技術研究開発機構 放射線医学研究所
放射線規制科学研究部 部長
盛武 敬 氏

〔参加者〕 協定加盟事業所からは16名/10事業所

〔講演会概要〕

本講演会は、医療現場では日々放射線被ばくがおこり続けている事を知っていただくために本タイトルで行なわれた。今回の講演は医療従事者の職業被ばくについてであった。講演の概要は以下の通り。

令和5年度、医療従事者の目や皮膚に放射線障害がおきているか調査を行い、162人の被検者（被ばく回数：100回弱/年の整形外科医）から回答を得る事ができた。

調査結果、白内障の変化（初期の白内障及び実際に白内障と診断された者）が64例（回答者の約40%）みられ、また指先の爪や皮膚に炎症もみられた。更に、被ばく線量が多い人ほど発症率が高くなる傾向が見られた。

これらの結果から、翌年、証拠を押さえる事に重点を置いて調査を行った。

調査結果、放射線医療現場では、個人線量計の使用率は3割程度、防護具の使用率は3～4割程度であった。放射線障害特別教育（電離則で定める特別教育）については多くの医師が知識充分であるとの事で受講しておらず、看護師については多量被ばくの恐れがないとして対象外としているところが多いことが判明した。

医療現場で被ばく状況をシミュレーションした結果、一番被ばくしているのが軽装備の看護師であったこと、更に防護板等の防護具を正しく使用しないと医療従事者が多量の被ばくをする確率が高くなることも判明した。

結果を受けて、個人線量計の使用の徹底や防護具等の正しい使用の徹底等を依頼している。

医療従事者の被ばくは現在も続いており、その影響も大きいので、今後も調査を継続すると共に対策を講じなければならない。通り一遍の座学よりもブリーフィング等が有効である。整形外科医の放射線障害、特に手指の癌有病率は想像を超えている。また、電離則の検診だけでは過少評価になりがちなので何らかの形でフォローしていかなければならない。

尚、本講演会では原子力施設の被ばくについては直接触れられていなかったが、多量被ばくによる人体への影響、個人線量計、保護具等の正しい使用や放射線障害特別教育等、施設に従事する者として心得ておかなければならない事が多くあった。

以上